

綱澤 満昭

「忠臣蔵」雑考

小林秀雄が昭和三十六年に、「忠臣蔵」に関する文章を書いている。

私はこの小林の文章に強い関心を持った。

日本人の思想を検討しようとするとき、これは、かなり重要な意味をもっている。

昭和三十六年という時代背景のなかで、「忠臣蔵」を一笑に付すような雰囲気があるが、これはおかしきという小林の発言に、私は興味をもつのである。

例えば、文化という点に関して、尾形光琳、俵屋宗達が尊重されて、「忠臣蔵」がぞんざいに扱われるということは面白くないと小林はいうのである。

彼は次のようにいう。

「近頃の学校の歴史でも、又、最近広く読まれた日本史などを見ても、この事件は、歴史家によって全く軽んじられているように見える。どうも気に食わぬ想いがしている。

これも亦不思議だ。

文化を重んずるといふ建前から、例えば、元禄時代の歴史では、光琳宗達を語らねばならぬとする。それはよいが、討入り光琳宗達を重んずるといふ事になれば、これは筋が通るまい。なるほど光琳宗達の出現は、重要な文化的事件であり、その影響するところは、人々の思想の上にあった、これはわかり切った事だ。それなら、討入事件も亦一種の精神的事件であり、その人々の思想に与えた甚大な影響力は、光琳宗達などの比ではない、という事が、何故わかり切った話ではないのか。」（小林秀雄『考えるヒント(2)』文藝春秋、平成十九年、一〇〇―一〇一頁。）

小林は、この赤穂の事件が歴史的社会的な大事件だといっているのではない。この事件によって、なんらかの社会変動があったというでもない。そういう意味では、じつにつまらぬ事件だといっているのである。

「事件は、極くつまらぬ事から起った二人の武士の喧嘩に始まり、決着のつかなかったところを、人数を殖やした大喧嘩で始末をつけたというだけの事だ。」(同上書、一一頁。)

問題は、この事件の後、多くの浄瑠璃や歌舞伎などで演じられたということだという。

たしかに、小林のいうように、この事件のあと、十二日後には、はやくも歌舞伎『曙曾我夜討』が江戸中村座で上演されている。これは、また後でのべるが、鎌倉時代の曾我兄弟の父の仇討にかこつけたものである。これは幕府によって三日で上演が禁止されたものである。三年後の宝永三年(一七〇六)には、近松門左衛門の脚本で、浄瑠璃『碁盤太平記』が、そしてその後、数々のこの事件に関するものが書かれ、語られ、演じられた。

松の廊下の刃傷事件より四十七年目の寛延元年(一七四八)には、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作、人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が、大阪竹本座で演じられた。歌舞伎化され、江戸においても大人気となる。

私は、また、小林の次のような主張にも注目しておきたい。史実についてのことである。

「風さそふ、花よりもなお我はまた、春の名残りを如何にかせん」

この歌は浅野内匠頭の辞世の句とされるものであるが、この

歌が浅野本人のものであるかどうかなど、どうでもいいことだという。小林はこういう。

「辞世は、彼の心的な或る史実の伝説である筈だ。屁理屈めいた事を言うようだが、史実自体は何んの意味も持たぬもの、という事をはつきり考へて欲しいというより外他意はない。」(同上書、二〇頁。)

ここでは、小林は浅野の辞世の句についていつているのであるが、これは小林が、「忠臣蔵」全体についていつているのだと思う。

話を元に戻すが、なぜ日本人はこの「忠臣蔵」に強い関心、興味をもつのであろうか。

小林の主張から離れるが、日本人は崇りの思想が好きだ。崇りというものは、人間の想像を超える。一瞬の場合もあれば、気の遠くなるほど長期にわたることもある。どうぞ崇らないで欲しいとお願いをする人々にたいし、容赦なく崇りは襲いかかる。

人知を超えたところに生起するものであるから、予想も備えも不可能である。科学も、理性も、合理もない。あるのは恐怖だけである。

崇徳上皇や菅原道真の崇りは、後述するとして、とりあえず、赤穂の事件を考えておきたい。赤穂の事件は、江戸城松の廊下の刃傷事件からはじまる。元禄十四年(一七〇一)三月のこと

である。

徳川幕府は、毎年のことであつたが、朝廷に年賀の挨拶のため、使いを出していた。そして、そのお返しとして朝廷は、使者を江戸城におくるといふことになつてゐた。吉良上野介義典や浅野内匠頭長矩が命ぜられたのは、京都から下向した勅使、院使の接待であつた。このセレモニー全般をとりしきるのが吉良で、饗応役の一人が浅野であつた。

赤穂事件の発端は、この吉良と浅野の喧嘩であつた。松の廊下で、留守居番の梶川与惣兵衛頼照と吉良が立ち話をしているところに、いきなり浅野が接近し、吉良に斬りつけた。吉良がふり返えるところ、浅野は再び斬りつけた。あわてて逃げようとする吉良を、さらに斬りつけたという話である。

この刃傷事件を知つた徳川綱吉はどうしたか。一方的に吉良を斬りつけ、殿中を血で汚したのは浅野で、迷わず切腹を命じた。吉良はいかなる責任もなし、とした。徳川時代の不文律としてあつた喧嘩両成敗といふことにはならなかつたのである。

赤穂城はとりつぶしになり、家臣は失業といふことになつた。

この松の廊下の事件といふものは、いろいろな点で不思議なところがある。そもそも、この事件がなぜおきたのかも、憶測の域を出ない。想像たくましい理由が作爲されてきた。

いくつかの例をあげておこう。

(1) 指導者であつた吉良にたいして、指導される立場にあつ

た浅野が、それ相応の謝礼をしなかつた。そのため吉良は浅野に冷たくあつた。

(2) 赤穂は塩の生産地として有名であり、その製法を知りたかつた吉良に、浅野は藩の機密だといふ理由で、教えなかつた。そのため吉良は不機嫌になつた。

(3) 浅野の妻が美人で、吉良は彼女に横恋慕してゐた。

(4) 浅野は短気で、かんしゃくもちで、その日は体調を崩してゐた。

どれもこれもうわさの域を出ないものばかりである。吉良が貪欲な人間であり、意地悪人であり、横柄人であつたといふ評価が生れたのは、それなりの理由があつたのかもしれないが、そういう評価を拡大、強調したのは、浅野を善人とし、話を面白くするための作爲であつたようにも思われる。

吉良が浅野にたいして、どの程度の意地悪をしたかなどについては、なんの証拠もない。浅野の切腹には、吉良に責任があるといふのは、のちの歌舞伎の作者や講釈師たちによつてつくられ、拡大されたところが多分にあつたらう。

松の廊下の刃傷事件から討入までの間には、いろいろな物語がある。

いま、私は史実がどうであつたかを問うてゐるのではない。吉良は無罪で、浅野は切腹といふ事実があるだけである。そして、語り継がれてきたのは、浅野や赤穂浪士にたいする同情で

ある。そして、さらにいえば、浅野や浪士の怨霊にたいする恐怖の念であった。

喧嘩両成敗をとらず、浅野に切腹を命じたのは、吉良ではなく徳川綱吉である。この綱吉にたいして、浅野らの怨霊が祟らぬはずがない。怨霊には地震や霊がつきものである。

切腹から少し時間は経過しているが、元禄十六年（一七〇四）十一月二十二日、関東に大地震があった。元禄の大地震と呼ばれるものである。

丸谷才一は、この地震について、こうのべている。

「元禄十六年（一七〇三）十一月二十二日の夜、関東に地震があつて江戸城の石垣が崩れ、櫓や多門（城の石垣の上に築いた長屋造りの建物）が多く倒れた。

江戸市内の被害ははなはだしく、相模、安房、上総では津波に襲われた。箱根は山崩れで道がふさがり、箱根以東の東海道の宿はほとんど全滅した。余震はなほ長くつづき、慶安二年（一六四九）以来の大地震だなどと言はれたのである。」（『忠臣蔵とは何か』講談社、昭和六十三年、六九〜七〇頁。）

木下順庵に学び、徳川六代將軍、家宣、七代將軍、家継に仕え、幕政を補佐し、文治主義の政治を推進しようとした、新井白石が、この地震の恐怖について、次のように記している。

白石、四十七歳の時のことである。

「我はじめ湯島に住みし比、みずのとつひ癸未の年、十一月廿二日の夜

わすく半過るほどに、地おびた、しく震ひ始^{すめ}めて、目さめぬれば、腰の物どもとりて起出^{おきい}るに、こ、かしこの戸障子背たふれぬ。妻子共のふしたる所にゆきて見るに、皆く起出たり。」（『折たく柴の記』松村明校注、岩波書店、平成十一年、一〇七頁。）

「かくて、はする程に、かんだ神田の明神の東門の下に及びし比に、地またおびた、しくふるふ。こ、らのあき人の家は、皆々打あけて、おほくの人の小路^{しょうじ}にあつまり居しが、家のうちに灯^{あかり}の見えしかば、『家たふれなば、火こそ出^いべけれ。灯うちけすべきものを』とよばはりてゆく。」（同上書、一〇八頁。）

「神田橋のこなたに至りぬれば、地またおびた、しく震ふ。おほくの箸を折ることく、また蛟^{あつま}の聚りなくことくなる音のきこゆるは、家々のたふれて、人のさけぶ声なるべし、石垣の石走り土崩れ、塵起りて空を蔽^{おほ}ふ。」（同上書、一〇九頁。）

綱吉は驚愕したにちがいない。国家社会の安全祈願を可能なかぎり、各方面に命じている。

綱吉を動揺させたのは、天変地異だけではなかった。彼の身辺にも次々と不幸が生じたのである。宝永元年（一七〇四）には、紀伊の徳川綱教に嫁いでいた娘の鶴姫が死んでいる。翌年には生母桂昌院が死亡。宝永六年（一七〇九）には本人が他界している。

さきの大地震に続いて、宝永四年（一七〇七）十月四日には、マグニチュード八・四という大地震がおきている。

浅野の崇りが、その激しさを増していると、多くの人が想像したにちがいない。浅野の真の敵は吉良ではなく、綱吉だったのである。吉良を殺すことによって、綱吉を呪詛するということだった。この際、浅野が吉良を斬りつけた理由など、どうでもよいのであって、問題は喧嘩両成敗にせず、浅野に切腹を命じた綱吉だったのである。

浅野は綱吉にたいして、なにもいつてはいない。むしろ、自分のとつた行動は、間違っていたにもかかわらず、斬首ではなく、名誉ある切腹を命じられたのは、ありがたいことだといっている。綱吉のことを表面に出さず、吉良を討つたことに、赤穂事件の深淵があるように私は思う。

人間が不気味さを感じるのには、はっきりしないところである。つまり、光の届かぬ奥の奥にかくされているものの存在に恐怖を感じるのである。

丸谷才一は、松の廊下の刃傷事件について面白い発言をしている。

「理解できるのは、浅野内匠頭がなぜ吉良上野介を殿中でんちゆうで刺さうとしたかではなく、さういふ愚行を犯した彼なのに愛想つかされず、どうして復讐をもらへたか、といふことなただけれど。わたしの考へでは、あれはどう考へても納得のゆかない怒り、わけのわからない逆上、理由不明の取り乱し方だったからこそ、かへって逆に人々の畏怖の念を強めたのだった。ど

うしてあんなことをしたのか、狐につままれたやうな思ひだったからこそ、その怨霊は恐れるに足りたので、なぜ憤激したのかあつまりわかるのでは、荒人神としての凄味がきかなかつたらう。」（『忠臣蔵とは何か』、七六頁。）

浅野はすでに御霊神になっているのである。御霊神になる資格があるように、つくられたのである。こうなれば、どのような強力な権力も、支配力も彼の霊に勝つことはできない。ただ、祈るだけである。御霊信仰というものはそういうものである。

日本の歴史の裏側に、奇妙な歴史がある。それは死んだ人が生きている人を、また、敗者が勝者を支配するという歴史である。弱肉強食が鉄則になっている国では信じられないことである。崇りの思想といつてもよい。

表舞台での勝利が、必ずしも永遠の勝利ではなく、死者はさう簡単にあきらめはしないということでもある。

谷川健一は、死者の魔が支配する歴史が日本にはあることを次のようにのべている。

「普遍的な発展の法則にしたがつている日本歴史の裏側に、もう一つの奇怪至極な流れがある。それは死者の魔が支配する歴史だ。……(略)……それは表側の歴史にたいしては挑戦し、妨害し、畏怖ふぶさせ、支配することをあえて辞さない。死者は、生者が考えるほどに忘れっぽくないということを知らせるため

に、ことあるごとに、自己の存在を生者に思い出させようとするかのようだ。この魔の伝承の歴史——をぬきにして、私は日本の歴史は語れないと思うのだ。……(略)……弱肉強食が鉄則になっているヨーロッパの社会などでは考えられないことだが、敗者が勝者を支配し、死者が生者を支配することが、わが国の歴史では、れんめんとつづいていっている。」(『魔の系譜』講談社、昭和五十九年、一二頁。)

たしかに、谷川のいうように、死者が生者を、敗者が勝者にまとわりつき、生者、勝者を安眠させないという歴史を、日本に見ることは容易である。

死者の怨霊が、勝者、生者をながく支配しつづけた第一人者として、崇徳上皇をあげることに異論はないと思う。

怨恨、呪詛を原基とした反倫理、反道徳的行為を行なう強烈な霊としての崇徳上皇を見ておこう。

生れたときから、すでに不幸を背負ってしまった崇徳上皇は、父親である鳥羽天皇との間に、避けては通れぬ確執を持ってしまったのである。彼の実父は白河法皇であり、母は鳥羽の妃璋子であった。このことから、彼は「叔父子」と呼ばれていたという。五歳で一度皇位につくが、二十二歳のとき、鳥羽の策謀によって、異腹の弟で三歳の近衛に天皇の地位を奪われた。その後、崇徳は数々の辛酸をなめる。院政への望みも断たれ、新朝廷とは相容れない存在となった。

ついに保元の乱(一一五六)となる。この戦いは、崇徳上皇側の敗北に終り、反御白河勢力は一掃されることになり、上皇は讃岐に配流されることになった。

この配流の地で、崇徳のやったことは、三年もかかって血のしたゝる指で、五部大乘経(華嚴・大乘・般若・法華・涅槃)の完成であった。この完成したものを、願はくば、しかるべき場所に納めてくれと崇徳は懇願した。『保元物語』には、こうある。

「御自筆に五部大乘経を三年にあそばして、御室に用させ給ひけるは、『御生菩提のために、五部大乘経を墨にて形のごとく書き集めて候ふが、貝鐘の音もせぬ遠くに捨て置かんこと、ふびんに候ふ。御許し候はば、八幡の辺にても候へ、鳥羽か、さなくは長谷の辺にても候へ、都のほとりに送り置き候はばや』と申させ給ひて、御書の奥に御歌を一首、あそばす。

浜千鳥跡は都に通へども

身は松山に音をのみぞ鳴く」(『保元物語』目下力訳注、角川書店、平成二十七年、二一九〜二二〇頁。)

崇徳の願いは、かなえられることはなかった。彼の怒りは頂点に達し、次のような形相になっていた。

「その後は、御髪も剃らず、御爪も切らせ給はで、生きながら天狗の御姿にならせ給ひて、」(同上書、二二二頁。)

長寛二年(一一六四)八月二十六日、四十六歳の若さで、無

念のうちに他界する。九年間の配流生活であった。

崇徳の遺骨をどうするか、側近の人たちは、都に指示をおおいだ。都からの回答がくるまで、死体は泉の水に沈められた。腐敗を防ぐためである。

都からの回答は、上皇の死体は白峯山に葬れとの冷たいものだった。

遺体を入れた柩は、白峯山に登り始めるが、途中、雷鳴とどろき、激しい雨に遭遇した。柩をかついでいた人たちは、休息をし、その柩を石の上に置き、雨のやむのを待った。

そのときのことである。石の上に置いた柩のなかから、突然血が流れたのである。崇徳が死んで二十日後のことである。石はその血で真赤に染まったという。柩をかついでいた人たちは驚き、その血で染まった石を御神体として、祠を建て、「血の宮」と命名した。やがて、白峯山の頂上で柩は荼毘に付されたが、そのときの煙は都の方向になびいたという。

上田秋成に『雨月物語』（安永五年、一七七六）という作品があるが、そのなかに「白峯」がある。このなかには、崇徳上皇の憤怒がよく表現されている。

白峯というところに崇徳の墓があると聞いて、西行はこの山に登る。崇徳の墓は次のようなところにあつた。

「松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡日すら小雨そほふるがごとし。児が嶽といふ峻しき嶽背に聳だちて、千仞の谷

底より雲霧おひのほれば、咫尺をも鬱悒ここ地せらる。木立わづかに間たる所に、土墩く積たるが上に、石を三がさねに畳みなしたるが、荊棘薜蘿にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらなされて、さらに夢現をもわきがたし。」（上田秋成『雨月物語』、高田衛・稲田篤信校注、筑摩書房、平成九年、二三―二四頁。）

西行は崇徳上皇の声を聞き、亡霊に向い、頭を地にこすりつけ、泣きながら次のように申し上げた。

「『さりとしていかに迷はせ給ふや。濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜の法施に随縁したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御ころにし侍り。ひたぶるに隔生即忘して、仏果田満の位に昇らせ給へ』と、情をつくして諫奉る。」（同上書、三三頁。）

西行の言葉を軽くあしらつた崇徳は、笑いながら次のようにのべたという。

「新院呵々と笑はせ給ひ、『汝しらず、近来の世の乱は朕なす事なり。生きてありし日より魔道にころろししをかたふけて、平治の乱を発さしめ、死て猶朝家に崇をなす。見よ見よ、やがて天が下に大乱を生ぜしめん』といふ。」（同上）

さらに西行は、崇徳の霊にたずねている。あの「保元の乱」は、私憤によるものか、それとも天の命令か、と。

崇徳は血相をかえて次のようにのべた。天皇という地位は、

現世で最高のものである。それを乱すようなことがあれば、天誅が下されるのは当然である。私は断じて私憤などで事をおこしたことなどない、と。

崇徳の怨霊は、次々とその威力を發揮し、味方にはこのうえなくやさしいが、敵にたいしては、鋭い恐怖を与え、多くを死滅させている。

崇りの継続期間は、気の遠くなるほど長い。百年、二百年、五百年経つても、その威力は消えない。

時代は移り、慶応二年（一八六六）、孝明天皇は、讃岐の地に眠っている崇徳の霊を、京都に移す計画をする。孝明天皇がそのことを実現することなく死去すると、明治天皇がその遺志をついだのである。

明治天皇は、慶応四年（一八六八）八月二十五日、大納言源朝臣通富を勅使として讃岐にやり、崇徳の霊を京都にむかえようとした。八月二十六日は、崇徳の命日であるが、その日七百年祭が行われている。

勅使たちは、二十八日に坂出港を出て、九月五日に京都に着いている。

孝明天皇の遺志をついだとされる明治天皇の願いは、次のようなものであった。慶応四年といえば、戊辰戦争の年である。この戦いにおいて、崇徳の怨霊がもしも朝廷側につかず、相手側にまわったとしたら一大事。

谷川健一の説明をあげておこう。

「慶応四年といえば、ときあたかも、戊辰ぼしんの役の年、朝廷方は征討軍を東上させ、まさに奥羽諸藩を挑発して、一戦をまじえようとしていた。このとき崇徳上皇の霊が、奥羽諸藩のほうに味方して官軍をなやましたとしたら、それこそゆゆしき事態になるかも分からないと、朝廷は判断した。そこで、京都に御還御をねがい、明治天皇の宣命にも、『比叟皇軍に附向い奉る陸奥出羽の賊徒をば速やかに鎮め定めて天下安穩に護り助け賜え』という結語を入れることを忘れることができなかったのである。」（『魔の系譜』、五四頁。）

崇徳上皇が他界して、なんと七百年も過ぎ去っている。それでも彼の怨霊は生き続け、崇り続けているのである。七百年も崇り続ければ、勝者が勝者ともいえず、敗者が敗者ともいえない。血を見る抗争は、星の数ほどあるが、皇位継承をめぐる闘いは熾烈をきわめる。

事実をいつわって相手をおとし入れる争いは、天皇、皇子らの歴史上、数え切れないほどある。正義をかけた反権力の闘いに破れた人たちの怨霊はどこまでもはかりしれない災禍をもたらす。

民衆は、一方でその怨霊を恐れはするが、他方でそれを利用して、逆にときの支配権力構造にたいし、レジスタンスの武器にする。

いま一人、雷神の名をほしのままにして、怨霊のボスとなり、ついに鬼になり世間を震撼させた菅原道真をあげておきたい。道真は最後は、靈験あらたかなる神になって、民衆にも愛され、まつられることになる。

承和十二年（八四五）に生れた道真は、幼少の頃より、詩作に長じていた。三十三歳で文章博士となる。宇多天皇に拔擢され、異例の出世をしてゆく。蔵人頭となり、醍醐天皇が即位すると右大臣となる。

このときの左大臣が、撰閔家出身の藤原時平であった。この藤原時平にすれば、たかだか学者であるにすぎぬ菅原道真が、右大臣とは、まったく面白くない。なんとかして失脚させたかった。誹謗中傷のかぎりをつくして、時平は道真を失脚させた。道真は大宰府に流された。大宰権師という肩書であるが、一応これは九州地方の長官である。しかし、中央からは断絶されたものであった。

大宰府での生活は次のようなものであった。

「道真の大宰府の生活は惨めであった。空家あきやであった官舎は、床も朽ち、縁も落ちていた。井戸はさらい、竹垣は結わねばならなかった。屋根は漏って、蓋おほう枝もなく、架上に衣裳を湿うるおし、箱の中の書簡を損する始末であった。しかも、虚弱のかれは、健康の不調を訴えることがしばしばである。胃を害し、石

を焼いて温めても効験はない。眠られぬ夜はつづき、脚氣と皮膚病にも悩まされた。」（坂本太郎『菅原道真』吉川弘文館、昭和三十七年、一二〇頁。）

断腸の思いを抱いて延喜三年（九〇三）二月二十五日、この世を去った。

時平を怨みながらこの世を去った道真は、平安貴族たちを恐怖のどんぞりにおとし入れた。道真が他界してからというもの、激しい雷雨がつづく。雷の恐怖というものは、自然界の恐怖のなかでも極高のものである。一瞬にして、巨樹を真二つに切り裂き、稲妻は大地に突きささる。耳をつんざくような雷鳴の響きに、人々は恐怖を感じ、魔性の神を思ったにちがいない。神と雷は結びついている。

「落雷は多く巨樹の上に見られる。雷電やんで後、亭々たる巨樹が真二つに割け倒れてゐるのを見た時、古人は雷神を目して、恐るべき偉大なる鉞の所持者としたのに不思議はない。印度の最高神 Indra は雷火の鉞を振りまはすと云ふ。」（高崎正彦『金太郎誕生譚』桃風社、昭和四十六年、二〇頁。）

『日本紀略』によれば、延長八年（九三〇）、極度の旱ばつが続くので、醍醐天皇の居地である清涼殿で、藤原時平や藤原清貫らが集まって、雨ごいの話をしていた。突然、黒雲があらわれ、雷鳴とどろき、どしゃぶりとなり、清涼殿に雷が落ちた。

藤原清貫は即死、平希世は顔を焼き、天皇は病にふす。これ

はすべて道真の怨霊のしわざであるということになった。彼の怨霊は次第に激しさを増し、貴族たちはいうまでもなく、一般民衆の恐怖も年々強まった。

この段階で、道真の怨霊は、体制継続側の倫理規範からいえば、いうまでもなく、反倫理的行為であり、許されないものである。

しかし、注意する必要があるのは、この道真の怨霊は、究極的なところ、天皇制にたいして、矢を放っていることになるかということである。天皇制にたいし、敵対しているように見えるが、最終的に、道真の霊のパワーというものは、天皇制の体内に吸収され、その体制を維持、強化するのに役立つているとは考えられないか。道真の怨霊は、最終的にどこに向ったのか。藤原時平、およびその関係者にたいし、激しい怒りを発揮する道真の霊も、天皇制そのものにたいしてはどうか。

天皇制というものは、捕え所のないもので、政治と宗教という二つの世界を巧妙に渡り歩き、本質を顕在化させない。

天皇制が風雪に耐え、長期にわたり維持されている裏には、そういった複雑な構造があるからである。

農耕民族の祭主としての天皇は、政治の世界で、いかなる責めを受けようとも、決して滅びはしない仕組みになっている。道真の敵が時平らに限定されてゆき、天皇制は無傷のままदैられる状況を次のように説明する人がいる。

「道真の場合にあきらかなように、責任は全て藤原時平へいき、天皇そのものには傷はつかない。むしろ天皇はそこで時平を支持する側から、あるいは時平の書いた政治的筋書きに署名した立場から、方向転換をして、荒ぶる道真の霊をなくさめ、その災害から民衆を救うための祭主の立場に立つのである。……(略)……伝説の中で道真の霊に対応するのは、僧侶であり、神官であり、最終的には天皇である。天皇はいわば政治的な面と宗教的な面をもった両棲類であり、責任を追求されるとたちまち宗教的な次元へかくれてしまう。……(略)……しかもここで大事なことは天皇が道真の霊には敵対しているようであるが、そうみえるのは政治的な次元のことであって、宗教的な次元では荒ぶる霊とそれを祭る祭主というような形になって、必ずしも対立していないということである。」(渡辺保『世形の運命』紀伊国屋書店、昭和四十九年、三九〇頁。)

祖先崇拜が天皇制の精神的基盤になっていることは、民俗学的研究などによっても明らかで、わかりやすい。しかし、怨霊の恐ろしさが、王権を最終的には支えるものとなるということとは、そう簡単に理解できるものではない。

しかし、この怨霊もいつの日にか和霊となり、天皇制と手を結び、その安定性を確保することは、実に奇妙な精神史ではな

いか。

理不尽な虐待、追放を受けて、ついに葬り去られた人たちの怨霊のもたらしたものについて、少し見てきた。この怨霊の怒りは、個人の領域をこえて、社会全体にまでおよぶこともある。この怨霊の怒りを鎮めようとして、数々の鎮魂の儀がとりおこなわれてきた。怒れる怨霊を鎮めるための信仰を御霊信仰という。

この御霊信仰と忠臣蔵の関係を強力に主張した人に丸谷才一がいる。彼の主張を少し見ておきたい。

忠臣蔵を基底で支えているものは、武士道ではなく、土俗信仰の一つである御霊信仰だという。御霊信仰こそが忠臣蔵の本質だという。

赤穂事件と鎌倉時代の曾我兄弟にある仇討事件とのつながりを、丸谷は繰り返し指摘している。どちらも御霊信仰が根本にある。これらは身近な死者の霊をなくさめるために立ち上った事件であるという。

丸谷は、赤穂事件そのものが、曾我兄弟の仇討という歌舞伎などの影響であると、次のようにいう。

「あの事件はもともと江戸の曾我ばやりのせいで起ったものだった。『歌舞伎年表』によれば、元禄元年（一六八八）正月の江戸三座、つまり中村座、市村座、山村座はいづれも曾我狂言、三月の三座も曾我で、これ以後、元禄期の江戸歌舞伎はほとんど毎年のやうに、そして多い年には何度も曾我物を出して

ゐるし、これに記載もれが加はることは言ふまでもない。……（略）……とにかくあの十数年間、江戸の人々の心は、英雄の規範としての曾我兄弟によって染められてゐた。十郎と五郎をぬきにしてあの時代を考へることは、富士の見えない江戸の街を思ひ描くやうなものなのである。」（『忠臣蔵とは何か』、二五―二六頁。）

赤穂事件の主役たちが、吉良上野介を殺害しようと思ったとき、真先に彼らの頭に浮んだのは、曾我兄弟の顔だったと、次のようにいう。

「赤穂の浪士が仇討を思ひ立つたとき、彼らの心に浮んだ先例は曾我兄弟だった。あるいは曾我兄弟しかなかった。これは断定して差支えないやうな気がする。人生論的な古典主義といふ点でも、実際のな手引きとしても、これ以外にはあり得なかつたらう。」（同上書、六三頁。）

丸谷はこんなふうにもいう。

「充分に考へた上か、それとも直感的に思ひついたのでのかはともかく。赤穂の浪士が自分を曾我兄弟になぞらへてゐることは、当時、誰にもわかつてゐた。そして仇討を志す彼らのうち、読書の癖のある者が、『曾我物語』を読んだ、あるいは読み返したに相違ないことは、これも容易に見当がついた。」（同上書、六五頁。）

「赤穂の浪士が曾我兄弟に範を取ったことは、元禄の事件と

建久の事件とをくらべればはつきりする。まるであぶり出しのやうに相似点が浮びあがるのである。」(同上書、六六頁。)

丸谷はこれほどまでに赤穂の事件が、曾我兄弟の仇討に似ているといふのであるが、その曾我兄弟、『曾我物語』とは、いったいかなるものであるのか。その概略を知っておきたい。主役である十郎、五郎兄弟の仇討は、次のような背景からはじまる。

安元二年(一一七六)十月のことであるが、平治の乱で敗北を喫し、伊豆に配流されていた源頼朝を慰めるため巻狩が催された。集まった武士たちは、武蔵、相模、伊豆、駿河の者たちであった。

巻狩が終わり、武士たちは相撲をとったり、狩りの成果で酒宴を楽しんだ。宴も無事終わり、一行は帰路につく。その時、事件は起きた。

宴を楽しみ、馬上の人となった伊豆の豪族伊東次郎祐親、その息子河津三郎祐泰に、どこからともなく矢が飛んできて、祐泰に命中した。彼は落馬し、その場で命を失った。

『真名本・曾我物語』にこうある。

「安元式年丙申神無月十日余りの事なるに、河津三郎助通、生年三十一にて八幡三郎が手に懸り、伊豆の奥野の口、赤沢山の麓、八幡と岩尾山との岨、児倉追立と云ふ巖石にて、露の命の消えけるも、乃往過去(前世から)の約束、流来生死

(迷いの世界を生れかわり死にかわりする境遇)の有様、思ひ遣ること悲しけれ。そもそも、父伊藤次郎助親は、我が身も疵を被りながら、息子が伏したる処に寄りつつ、『いかにや。大事の手(重傷)か』と問ひけれども、左にも右にも物をば云はざりけり。」(『真名手・曾我物語(一)』青木晃、池田敬子、北川忠彦他編、平凡社、昭和六十二年、六九頁。)

工藤祐経にいわれて八幡三郎が殺した河津三郎祐泰は、まだ三十一歳の若さで、五歳と三歳の男の子がいた。のちの十郎と五郎である。

伊東と工藤はもともと同族であったが、いつの間にか領地争いが生じていた。河津三郎の妻の悲しみはたとえようもない。悲しみながらも彼女は、二人の子とお腹のなかにいる子に、父の仇を討ってくれと頼む。

「三歳になりける管王は少ければ、これをば聞きも知らで、ただ母の膝の上に手遊びして(手で物をいじって)楽しみ居たりける。五歳になる一万は、父が空しき死屍を嗜々と守らへて(じつと見つめて)両眼に涙を雑とぞ浮べける。」(同上書、七四頁。)

この時点で、すでに十郎、五郎の仇討の歴史は、始まっている。

河津三郎の妻、満江は、夫の四十九日を待って、仏門に入り、尼になる決心をしていた。

それはそれでよいとしても、残された子どもたちはどうなるのか。このことを案じた河津三郎の父祐親は、満江に縁談をもってきた。相手は祐親の甥にあたる曾我太郎祐信で、武人であった。祐信は満江たちをあたたかく迎え入れたという。

伊豆に配流されていた源頼朝は、妻の父である北条時政の強い援助もあって、東国を制圧し、鎌倉に政権を樹立した。

曾我兄弟の祖父伊東祐親は、頼朝と敵対することになり、ついに自殺。一方、兄弟の仇討的である工藤祐経は、頼朝の厚い支援を受け、鎌倉幕府の一人の有力者になる。このにくき工藤祐経を曾我兄弟は、虎視眈々とねらうのである。

建久四年（一一九三）、いよいよそのときがきた。この年の五月に、頼朝らは富士の裾野で狩りに興じた。多くの武士が参加したが、当然のことながら、そのなかに、工藤祐経の姿があった。そして、この祐経を長年ねらっていた、十郎、五郎兄弟もいた。討つ機会はなかなかめぐってはこなかったが、五月二十八日の深夜にそのときがきた。兄弟二人は、ついに工藤祐経を殺害した。兄十郎はその場で討たれ、弟五郎は捕われの身となった。

頼朝は弟五郎に次々と尋問するが、ついに次のような言葉を発する。

「鎌倉殿この由を聞き食されて、『これ聞き候へや、各々。哀れ（あっぱれ）男子の手本や。これ程の男子は末代にもあるべ

しとも覚えす。……（略）……種姓高貴にして心武き者なれども、運尽きて敵のために執（捕）られて後は、（命を助かるうとして）心も替り諂ふ詞もあり。（それなのに）この者は少しも陋臆たる事もなし。これを聞かむ輩はこれを手本と為すべし。陋臆たる者千人よりかやうの者一人こそ召し仕はめ。助けばや」と仰せらるれば、」（『真名本・曾我物語2』 笹川祥生、信太周、高橋喜一他編、福田晃解説、平凡社、昭和六十三年、二二〇頁。）

この曾我兄弟の仇討は、日本人の深層心理に深くいこみ、ながい間継承されていったのである。このことと、赤穂事件とを比較して、坂井孝一は次のようにのべている。

「曾我兄弟の敵討ちは日本人の心に深く根づいていたのである。河津三郎の非業の死に始まった一つの悲劇が、曾我兄弟の敵討ちという新たな悲劇を生み、敵討ちという悲劇が兄弟を英雄に仕立て上げていったともいえよう。今日、敵討ちといえど、赤穂浪士の討ち入り、いわゆる忠臣蔵を思い浮かべる人が多いであろう。しかし、その歴史の長さ・文化的な広がりという点では、曾我兄弟の敵討ちの方がはるかにまさっている。」（坂井孝一『曾我物語の史実と虚構』吉川弘文館、平成十二年、四頁。）

ところで、作者不詳の曾我兄弟の仇討事件をテーマにしたこの物語は、多くの人間の関心をひいたのであるが、いったいこ

の物語は、どちらの方向を向いているのか。

赤裸々に反源頼朝色を出してはいないが、兄弟が工藤祐経を討つということは、鎌倉幕府にたいする前哨戦とはいえないか。このことに触れて丸谷が次のようにのべている。

「在来の『曾我物語』解釈にとらはれず素直にテキストと向ひ合へば、無名の作者をあやつって筆をとらせたものが体制と権力への怨みだったことが、ごくあっさりとして見て取れるはずである。……(略)……すなはち政治論的な層で言へば、『曾我物語』とは、意識下によむ真の敵(源頼朝)を討つかはりに意識の表面にある贗の敵(工藤祐経)を討つ、不発に終った『謀反』の叙事詩であった。」(丸谷、前掲書、四三―四四頁。)

建久四年(一一九三)のこの事件があつたあと、次々と源側に死者がでてくる。頼朝、頼家、実朝と続いて他界し、やがて源氏は滅ぶことになる。この歴史的事実を見て、多くの人が、曾我兄弟と深いかかわりがあると思つたとしても、不思議はない。曾我兄弟の霊を丁重に取り扱わねば、とんでもない災難が発生し、多くの人が不幸に陥るのであることが予測されたのである。それはちょうど崇徳上皇や菅原道真の場合がそうであつたように。

いつの世にあつても、権力というものは、闇を嫌う。闇のなかで生きるえたいの知れないものに、異常な神経をつかうのが

権力というものである。いつ、どこで襲ってくるかわからない悪鬼うごめく闇の世界に権力は戦慄する。

先に取り上げた崇徳上皇、菅原道真、曾我兄弟、浅野内匠頭らの怨霊の恐怖におののいて、その怨霊を鎮めるために、権力は可能なかぎりの丁重さでもって、処するのである。

一度は昼や光が闇を支配することが正義だという神話をつくるが、それが誤りであつたことを告げるのである。

いかなる支配権力も、被支配者たちを完全に打ち負かすことはできない。そして、一度敗北を喫した敗者、死者も、いつの日にかと反逆の機会をねらっている。

理不尽な死を強要された人たちの怨霊は、自分が納得するまで、けつして成仏することはない。栄華の世界で、快樂にふける勝者、生者にたいし、呪詛を内面に宿しながら、彼らを執拗に苦しめる。その場合、敗者、死者は鬼となる。天下の大道を正すには、純粹無垢で権謀術数にたけていない鬼とならざるをえないのである。

苦渋の日常を余儀なくされている多くの民衆にとつては、鬼の強力なパワーが欲しいのである。その強力なパワーによって、権力と対峙したいのである。

鬼のボスに酒呑童子がいるが、この強力な鬼を退治したときされるのは、歴史上実在する源頼光である。「酒呑童子伝説」が、英雄による鬼退治の話であることはいままでもないが、一般民

衆が英雄とされる頼光よりも酒吞童子の方に軍配をあげるのは何故か。

同じ鬼に関する伝説であっても、「御伽草子」と「桃太郎伝説」とでは、鬼にたいする目線が違う。「桃太郎伝説」では、桃太郎はどこまでも正義であり、鬼が島の鬼は悪で、期待も同情もされない。「御伽草子」の酒吞童子も悪は悪であるが、なぜか、民衆の目はやさしく、同情的である。

今日も、大江町では毎年十月の最後の日曜日に、酒吞童子の祭りが執り行われている。

金銀財宝を盗み、娘をかどわかすとされる憎き鬼を、いま、なぜ蘇らせようとするのか。逆に、なぜ鬼を滅ぼした頼光のお祭りはないのか。いま、必要なのは、鬼の復活ではなく、鬼を征伐した頼光の顕彰であり、活用ではないのか。しかし、そうはなっていない。

大和岩雄が、桃太郎と酒吞童子の話の間に、鬼をめぐって次のような違いがあることを指摘している。

「このちがいは、桃太郎譚が一般の定着農民の昔話・民話なのに対し、酒吞童子譚が謡曲を原型とすることによる。『大山』の作者（世阿弥または宮僧）らは、室町幕府御用の芸能者だが、彼は漂泊芸能民の頂点にいた存在で、同類の多くは、天皇の『オオミタカラ』といわれる定着農民から差別されていた。彼らは、謡曲で『山育ち』といわれる酒吞童子と、五十歩、百

歩の存在であった。その彼らが作った話だから、平地の公民たちによる桃太郎譚と比べて、鬼への思いが違うのである。」（大和岩雄『鬼と天皇』白水社、平成四年、一二四頁。）

大和は鬼を厳しく見る農民にたいし、漂泊民は甘いというのである。たしかに、作者がどこに立っているかによって、生れる作品が、それなりの色合を持つのは当然であるが、それがいかなる人々によって語りつがれてゆくかが、これまた、きわめて重要なことである。

権力をにぎり、栄華をきわめる生活者の裏で、地獄のような日常を強いられ、ゴミのように放擲されてきた多くの人々にとって、鬼の怪力は、夢にまで見た憧れのものであった。

現実世界では不可能な望みを、物語のなかでもいいから果したいと欲するのは至極当然のことである。

苛酷な日常に生きる多くの人々にとって、酒吞童子は親しみ深く、なくてはならない存在だった。次のような発言がある。

「何よりも考えさせられることは、江戸時代にこの酒吞童子の物語をめぐくみ育て継承したのは、支配者の側ではなく、民衆であったことである。そして鬼への怨念はあまりみられない。さまざまな呪力と強いエネルギーをもつ鬼に親しみをこめ、身を破壊させつつ現実を生き抜いた鬼に、苛酷な封建社会に生きる民衆の心がよせられているのではなからうか。」（大山山鬼伝説一千年祭実行委員会・鬼文化部会編『大山山鬼伝説考』平成

二年、一〇九頁。)

酒呑童子をはじめとする鬼たちの心情は、常に差別され、虐待され、排除され続けている民衆の心情でもあった。

貧困で、苦しく、生存ギリギリのところでも多くの人は生きていく。しかし、その悲哀も、不満も現実世界では実現も表現もできない。彼らの不満を爆発さす場所も時間も奪われている。いかんともしがたいこの現状を打破してくれるものは鬼以外にない。理不尽な死を強要された人たちは、すべて鬼になって、復讐の機会を待っている。

常識的な倫理や道徳では、はかり知ることのできない反逆の行為を、これらの死者の怨霊は考えている。この世における狡知にたけた権力者どもの裏をかいて、徹底的に滅ぼしにかかる。

反論の一言も許されることなく、切腹を命ぜられた人間にとつては、神も仏もない。勝者、生者を安眠させてなるものかという恨みだけが残っている。

喧嘩両成敗とはならず、一方的に切腹を強要された浅野内匠頭、その主君のために決死の行動をとった赤穂浪士への礼賛は、昭和十一年の二・二六事件の青年将校たちに寄せる礼賛に、なにか似てはいないか。

社会規範がどうであろうと、正義を貫こうとする人間は、鬼になっても純粹無垢であらねばならず、そこに権謀術数的「かけひき」があつてはならない。

二・二六事件で猛烈な精神を吐露している磯部浅一の「獄中日記」を見てみよう。激しくも哀しい磯部の声が聞こえてくる。

「何をワッ、殺されてたまるか、死ぬものか、千万発射つとも死せじ、断じて死せじ、死ぬることは負けることだ、成仏することは譲歩することだ、死ぬるものか、成仏するものか。悪鬼となつて所信を貫徹するのだ、ラセツとなつて敵類賊カインを滅尽するのだ、余は祈りが日々激しくなりつつある、余の祈りは成仏しない祈りだ、悪鬼になれるように祈っているのだ、優秀無敵なる悪鬼になるべく祈っているのだ、必ず志をたらぬいて見せる、余の所信は一分も一厘もまげないぞ、完全に無敵に貫徹するのだ、妥協も譲歩もしないぞ。」(「二・二六事件獄中記」『超国家主義』〈現代日本思想大系31〉、橋川良三編集・解説、筑摩書房、昭和三十九年、一六八―一六九頁。)

この磯部が心から尊敬していた人物に、皇道派将校相沢三郎中佐がいた。相沢は純粹な国粹主義者であった。権謀術数にたけた統制派の永田鉄山少将が許せなかった。昭和十年八月、相沢は永田を斬殺した。いわゆる「相沢事件」である。この「相沢事件」を、あの「松の廊下の刃傷」事件だとする人がいる。佐藤忠男である。彼の文章を引いておこう。

「二・二六事件の直前に、相沢中佐という愚直な国粹主義者の将校による軍務局長永田鉄山少将斬殺事件というのがあつた。永田鉄山少将は統制派のひとつの要に位置した人物と言われ、彼

が皇道派のハネあがりを抑えるために権謀術数をろうしている
と聞いた皇道派的な将校である相沢三郎が、地方の任地から台
湾へ転勤になる途中、東京に立ち寄って永田少将を陸軍省内で
殺したのである。これはまさに、『松の廊下の刃傷』である。
永田少将は純真な若者たちに意地悪をする老獪な権力者たちの
代表であり、その意地悪に忍耐を重ねていた侍が、ついに堂々
と神聖なるべき権力の殿堂の下真中で刃傷に及んだのである。』
(佐藤忠男『忠臣蔵―意地の系譜』朝日新聞社、昭和五十一年、
一六六頁。)

相沢三郎という日本にとって、なくてはならない忠臣の徒を
軍法会議にかけて死刑にしてしまう日本という国は、いったい
いかなる国か。これをやってしまった日本という国家は、相沢
の怨霊にしてやられ、亡国の一途をたどるであろうと磯部はつ
ぎのようにいう。

「八月三日、中佐の命日、読経す、中佐を殺したる日本は今
苦しみにたえずして七テン八倒している、悪人が善人をはかり
殺して良心の呵責^{かしやく}にたえず、天地の間にのたうちもだえてい
るのだ、中佐ほどの忠臣を殺した奴にそのムクイが来ないでた
まるか、今にみる、今にみる。」(磯部、同上書、一六九〜
一七〇頁。)

磯部にとって極楽という世界はない。地獄で強烈な魔力を
持った鬼となって、現体制を撃ち、逆転をねらう。誤った道を

謳歌している敵を討ち、天下大道を正すためには、鬼になる以
外に道はない。

現実世界に存在する、あらゆる規範、倫理、それに言葉まで
が、正義を排し、殺すためにあるとすれば、それに抗する道は、
ただ一つ、支配体制が作為したものは異質の絶対的規準を用
意することである。

巧妙に仕組まれた陰謀によって、追放、惨殺された人にとつ
て、春の海のごとき、おだやかで、平和な風景は要らない。

主要参考・引用文献

- 宮沢誠一『近代日本と「忠臣蔵」幻想』青木書店、平成十三年
- 佐藤忠男『忠臣蔵―意地の系譜』朝日新聞社、昭和五十一年
- 丸谷才一『忠臣蔵とは何か』講談社、昭和六十三年
- 野口武彦『忠臣蔵』筑摩書房、平成十九年
- 吉川英治他『七つの忠臣蔵』新潮社、平成二十八年
- 三田村鳶魚『横から見た赤穂義士』中央公論社、平成八年
- 船戸安之『赤穂浪士―物語と史蹟をたずねて』成美堂出版、昭
和四十九年

山本博之『東大教授の「忠臣蔵」講義』角川書店、平成二十九
年

山本博之『忠臣蔵入門』幻冬舎、平成二十六年

片山伯仙編著『赤穂義士の手紙』赤穂義士の手紙刊行会、昭和四十五年

内海定治郎『真説赤穂義士録』博美社、昭和八年

赤穂義士顕彰会『増訂赤穂義士事典』新人物往来社、昭和五十八年

谷口眞子『赤穂浪士の実像』吉川弘文館、平成十八年

小林秀雄『考えるヒント(2)』文藝春秋、平成十九年

長谷部史親編『忠臣蔵傑作大全』集英社、平成四年

『保元物語』日下力訳・注、角川書店、平成二十七年

飯田悠紀子『保元・平治の乱』教育社、昭和五十四年

坂本太郎『菅原道真』吉川弘文館、昭和三十七年

上田秋成『雨月物語』高田衛・稲田篤信校注、筑摩書房、平成九年

『超国家主義』(現代日本思想大系³¹)、橋川文三解説、筑摩書房、昭和三十九年

谷川健一『魔の系譜』講談社、昭和五十九年

大和岩雄『鬼と天皇』白水社、平成四年

『御伽草子』(下)、市古貞次校注、岩波書店、昭和六十一年

大江山鬼伝説一千年祭実行委員会・鬼文化部会『大江山鬼伝説考』、平成二年

坂井孝一『曾我物語の史実と虚構』吉川弘文館、平成十二年

新井恵美子『私の「曾我物語」』展望社、平成三十一年

『真名本・曾我物語(1)』、青木晃・池田敬子・北川忠彦他編、平凡社、昭和六十二年

『真名本・曾我物語(2)』、笹川祥生・信太周・高橋喜一他編、福田晃解説、平凡社、昭和六十三年

『曾我物語』、市古貞次・大島建彦校注、岩波書店、昭和四十一年

新井白石『折たく柴の記』、松村明校注、岩波書店、平成十一年